失われゆく式内社を求めて【第一回】　オキタリュウイチ

〈総論〉いま式内社が危ない

朝廷から重要視された神社を一覧にした『延喜式神名帳』。そこに記載された、かつて格式のあった神社がいま危機に瀕しています。かつて栄華をきわめながら、現在は見向きもされない延喜式内社にふたたび光を当てるにはどうしたらよいのか。事業再生を本職としながら地元徳島でフィールドワークを続けるオキタリュウイチが、古社の本来の姿を問い、再興のための手立てを探ります。

―オキタさんはもともと事業再生や企業のブランド化を本業にされていますが、いまでは様々な有識者に日本の古社を案内するような活動をされているそうですね。このような活動を行うようになったきっかけは何でしたか。

オキタ／私はこれまで、さまざまな企業のブランディングやマーケティング戦略を提案するような仕事をしてきました。その本業と同時に、〝キレる17才〟や自殺志願者を救うための社会活動も行ってきましたが、そこで重要だと感じたのが日本人にとっての〝ルーツ〟という大きなテーマでした。

過去の歴史を振り返るかぎり、現代の時代というのは、最も良い時代だと思います。切り捨て御免の絶対的な封建制にあっては、個人の人権は主張できないし、軍国主義の時代には頭上に爆弾が降ってきた。

現代のような恵まれた時代にありながら、なぜか多くの人々が〝強い閉塞感〟や〝違和感〟をもっている。生きがいを喪失している人や、自ら死を考えている人もかなり多い。

このような負を抱えている人々に共通しているとは何か。それは必ずしも個人的なレベルの欠点ではなく、もっと奥にある日本人としての〝ルーツ〟に関わっているように思えたのです。

ここで言うところの〝ルーツ〟とは、日本人が日本人らしく在るための要素であったり、過去から連綿と続く先祖とのつながりのことですが、そのような本来性を自覚している人ほど、個人的な悩みにくよくよせず、パワフルに生きているという事実に直面したのです。

分かりやすく言えば、〝ルーツ〟を自覚している人はしていない人よりもスパークしているということです。

これまで様々な企業の経営者や有識者を徳島の延喜式内社に案内してきました。あらためて数えてみると、百八十人以上を招いたことになります。そのような活動を続けているのも、やはり実体験とともに〝ルーツ〟を自覚してほしいという狙いがあります。

すでに社会的な知名度が高かったり、情報発信力をもっている人に方法を伝えれば、やがて社会全体にも拡散していくのではないかという期待があります。

―心の苦悩というのは、必ずしも個人的なレベルの問題ではないということですね。そのような〝ルーツ〟をめぐる問題から発して、古社に着目するようになった背景をお聞かせください。

オキタ／なぜ〝ルーツ〟を自覚している人が生き生きとしているのか。その理由をひと言で述べるのは容易ではありませんが、おそらくは、身体に束縛された小さな自己ではなく、より大きな他者もふくめた世界そのものが自己であるかのような意識になるためでしょう。

考えてみれば、古来から私たち日本人はそのような大きな自己像で生きていたように思えます。

古い神社や祭事に注目する理由もそこにあり、周囲の社会や祖先とのつながりまでが自己の延長であるという日本人らしい考え方が神社をめぐる営みに凝縮されていると感じたのです。日本人が神を祀るようになったのは、未来の子孫に至るまでその土地が豊かであることを願ったためであり、即時的な現世利益のためではありません。

まるでUSBメモリーを使ってデータをコピーするかのように、御祭神をコピー&ペーストし別の場所に増やしていく分祀（勧請）の仕組みも、小さな自己が豊かになるためではなく、つながりを増やしていくことで周囲まで豊かにしていこうという発想に依ると考えられます。

神社の入口やそこにいたる参道にランドマークとしての巨大な鳥居を建造するのも、幾世にもわたって神の所在を示すための方法ですし、各時代における職人技術の粋が集められた神社の木工彫刻もまた、数百年時代が経っても使用できるように耐久性が計算されるわけです。

そのように自己の利益よりも、他者への大義を果たしてきた祖先の仕事を目の当たりにすると、小さな有限の自己にこだわることが無意味に思えてきます。神社を中心に営まれる暮らしがあるからこそ、日本人らしい本来の姿にいつでも立ち戻れるのです。

―もともと神社があったからこそ、日本人は本来の姿に立ち戻れたわけですが、現在では各神社の合祀や統廃合の問題が生じており、そのような状況のなかで日本人らしさも失われつつあるということでしょうか。

オキタ／日本人が生き生きとするためには〝ルーツ〟への自覚が必要であり、加えて神社を中心とする営みが欠かせないことをすでにお話ししましたが、私は必ずしも全ての神社を等しく保持することが重要であるとは思っていません。

そこで、保持するべき核となる神社がどこに在るかを判断するために、公式の尺度が必要になります。その手がかりを得る上で、最も参考になるのが平安中期（九二七年）に編纂された『延喜式神名帳』に記載された社と祭神の一覧です。

『延喜式』という書物はもちろん政治的な意図もふくんでいたものなので、すべてを鵜呑みに出来るわけではありませんが、そこに記載されている社であり、おそらくは多くの神社の〝元社〟に当たる核となる神社が多いと考えられるのです。

各神社の〝元社〟を守る理由としては、それが朝廷が認めた格式のある神社であること以上に、その土地と結びついた固有の物語を有しているという事実があるためです。私たちの成り立ちに関わる、おおもとの〝ルーツ〟に遡るためには、その由来に関わるストーリーがなくては手がかりを得られません。

たとえば、関東の「酉の市」のルーツとなった神「天日鷲命（あめのひわしのみこと）」を祀る神社の起源は阿波の忌部氏にあり、天日鷲命を祀る忌部神社（いんべじんじゃ）は徳島県内に数社ありますが、そのなかで特に重要なのは、種穂忌部神社（ぼんぼきいんべじんじゃ）と山崎忌部神社（やまさきいんべじんじゃ）の二社ということになります。

神話では、阿波忌部の祖神にあたる天日鷲命が、関東（主に現在の千葉県）で農作物の不作に苦しむ人々に永続的な農法を教え、その結果感謝され関東一円の産業神として祀られ分霊されていく訳ですが、その「関東地方に譲渡するための種を徳島中から結集させた山」が阿波の種穂山であることから、種穂山にある種穂忌部神社はこの物語に直結していると解釈できます。

一方の山崎忌部神社にも、実際に麻の種を植えて、天皇即位のための重要な儀式「践祚大嘗祭（せんそだいじょうさい）」のために必須な麁服（あらたえ）という麻の御神体を制作してきたという事実があり、朝廷や今の天皇家にとっても重要な物語の舞台であったと解釈できる。

つまり、この二つの忌部神社はいずれもこの関東一円の農法や産業のルーツであり、天皇家にも深く関係するルーツにあたる、優先して守るべき重要な神社であると考えられるのです。

―式内社は優先的に守るべきものとして、認知

オキタリュウイチ
昭和51（1976）年、徳島県生まれ。クリエイティブディレクター。村式株式会社取締役。株式会社okita museum代表取締役。○○○

されているのでしょうか。

あるいは、もはやそのような基準は過去のものとして忘れられているのが現実なのでしょうか。

オキタ／『延喜式』に掲載された神社は、格式を備えた神社であったことからも、もともと立派な社殿をもち広大な社領を有していた社が多かったと考えられます。

しかしながら、かつての式内社に相当する神社を今日実際に訪れてみると、驚くほど社領が狭かったり、社殿がトタンやプレハブの粗末なものだったり、注連縄がチープなナイロン製だったり、中には本殿が半壊しているものもあり、散々な有様です。私はこの事実に驚愕しました。

かつては手厚く敬われ、細かく手入れをされていた神社であっても、現在の姿はみすぼらしく、「本当に式内社なのだろうか?」と目を疑わざるを得ません。

なかには状態のよい神社もありますが、今となってはほぼ全ての式内社がかつてのような美観を備えていないのが事実であろうと思います。信じ難いし悲しいことですが……。

―この『WAGO』での連載の意気込みをお聞かせください。

オキタ／私はこの連載を、式内社復興のためのファーストステップにしたいと考えています。

まずは私が訪れた式内社を中心に、毎号一社ずつ、さまざまな式内社を取り上げていこうと考えていますが、いずれの神社も日本のルーツに関して極めて重要な社でありながら、同時に〝存続の危機〟に瀕しています。

式内社が失われることで訪れる結末は、単に神社が失われるということだけではありません。要となる〝元社〟の喪失は、私たちの〝ルーツ〟を喪失することでもあり、つまりは日本の根源が忘却されることでもあるのです。

祖先の物語が失われるということは、日本人としての私たち自身が拠り所とするシナリオを喪失することでもあり、日々踏みしめている大地との関わりや自己のアイデンティティを見失うことでもあります。

日常、東京で仕事をしていると、新宿駅では日本語以外の外国語のアナウンスが流れており、コンビニで働く人は日本人を見る事のほうが少ない。今後二十～三十年の単位で見て日本の人口の激減を考えると、恐らく東京に住む日本人は四～五人に一人、なんて日が来ると思います。

そうなった時、「日本とは一体何なのか」「日本人とは一体何なのか」という課題に直面していくことと思います。

そんな中での、地域に残る古い神社というのは、唯一、私たちが自身とその奥にある大いなる自己を自覚できるタイムカプセルであり、だからこそ喪失して はならない特別な場所なのです。

そして、日本人はすべて祖霊は何らかの神として祀られている。その子孫が私たちである。そのように具体的に自覚し続けるからこそ、私はパワフルで居られるわけですが、日本人ならば誰にでもそのような原郷があるはずなのです。

インタビューより編集構成／聞き手：石黒壮明